
マイライフ = マイフェイト

クランツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイライフ＝マイフェイト

【Nコード】

N5408D

【作者名】

クランツ

【あらすじ】

魔法使いの家系に生まれた皐月龍介。両親が殺され今まで一人で生きてきた龍介。しかしある日、異世界に召喚されてしまった！？そこは剣や魔法が一般化された世界。元の世界に帰る方法も無くこの世界を旅することにした。これはコメディです、コメディ………のほほほ………多分（え

プロローグ

魔法

数千年前、この世界の先住民達が編み出した産物。

魔法を私生活や狩りなど、先住民達はためらいなく使っていく。

しかし、魔法の力はしだいに強大になって行く。

世界の混乱と崩壊を恐れた“神”は一部の家系のみしか魔法を使えぬようにした。

そして現代。

神に許された魔法使いの家系で一人の子供が生まれた。

数百年間その家系は才能が無かったのか魔力が感じられず、

代々受け継がれてきた魔法は風化するはずだった。

しかし生まれてきた子供からは魔力が発せられていた。

両親と祖父は「これで一族は安泰だ」などと言い、

その子供にあらゆる魔法を叩き込んだ。

その力は常人にも感じられる程強力で人々から異端の目で見られ、ある種の信仰者や教団から追われる破目になった。

そして時が過ぎ。

両親と祖父は殺された。

俺は自らの魔力を封印しようやく平穏を取り戻せた。

高校にも入り毎日を平和に過ごした。

一人暮らしは最初は辛かったが、もう慣れてしまっていた。

友達もできたし毎日を楽しく過ごしてきた。

16になり部活は剣道部に入っている。

ていうか無理矢理入れさせられた。

だがバイトがあるため部活に行ってる余裕は無く幽霊部員となっている。

そんな7月の暑い日

まさかその平穩が唐突に崩れ去ろうとは、知るよしも無かった。

プロローグ（後書き）

初めまして！ マイライフⅡマイフェイトを書くことになりました
クランツです。

龍介「皐月龍介だ、よろしく」

何でここに居んの？

龍介「さあ？」

まいいか

龍介「いいのか」

さて何故この小説を始めたかと言つとですね、
龍介「そんなもの語ろうとするな」

ひ、ひどい………

第1話 運命の日

ドドドド、ドドドド、ドドドッ……

「……………朝か」

時刻は6時。

一人暮らしなので毎朝弁当を作りあまったオカズを朝食にしている。
コンビニや学食という手もあるが金が掛かる。

「んっ……………」

軽く背伸びしてキッチンへ向かう。

キンコーンカーンコ ン

「おはようなつき皐月君」

「おはよう」

クラスメイトと挨拶を交わす。

席に座ると一人が歩み寄ってきた。

「おい皋月、昨日のテストどうだった？」

「うつせえ聞くな、クラスメイトB」

「B！？ Aは誰だ？ いやてか扱いひどっ！」

こんな話をする毎日。

だが飽きる事も無くこれはこれで気に入っている。

授業時間は過ぎて昼飯時。

弁当を手に持ちいつもの屋上へと向かう。

教室で食べてもいいのだがここで食べるのが好きなのだ。

「遅かったじゃないか龍介、今日のオカズは何だ？」

「腹減った」

目の前には二人。

一人は女性でこの学校の教師、剣道部の顧問をしている。

名前は柳沢涼子。

黒髪の長髪で今時珍しいポニーテール、結構綺麗なのだが本人は力
ワイイ系だと思っているらしい。

もう一人はさっきのクラスメイトB、以上。

「やっぱり扱いひどくない？」

「気のせいだ」

「ま、俺は柳ちゃんと食べれるなら何でもゴフツ！？」

涼子の拳がバカの腹に入る。

「私は教師だぞ、ちゃんは止めろ」

「毎度毎度、俺の弁当狙うなよ」

「別にいいじゃないか、減るもんじゃないし」

「いや減るから」

結局今日も分け与えることになった。

あのバカは側で倒れている。

そんなに効いたのだろうか？

「そういえば龍介、たまには剣道部に顔出せよ？」

「バイトあるから無理だ」

「顧問としてはそんな奴はさっさと退部させたいのだから」

「ならそうすればいい」

「めんどくさい」

こいつは……………

「臯月、まだバイトしてんの？」

いつの間にかバカが起き上がっていた。

「まあな」

「俺も始めようかな？」

「聞くなよ」

「どんなバイトだ？ 我が生徒B」

「柳ちゃんまで……………もうBでいいですよ！」

おお、何か泣きながら認めた。

「どんなってなあ……………エロイと「死ね」ギャアアアアアアアアア
アア」

やっぱバカだな……………合掌くらいはしてやるっ。

そして放課後、剣道部へは行かずバイト先へ向かう。
居酒屋で主に接客をしているのだがたまにつまみなども作ったりしている。

16からは普通無理だったのだが、一人暮らしで親も居ないとわかると快くOKしてくれた。

うん、世の中いい人はいるもんだな。

バイトを終えて家に帰る。

家に着くと夕飯を作り、しばらくしてから筋力トレーニングを一通りこなす。

追われる身となつてからは毎日身体を鍛えているのだ。

それから風呂に入る、心地よい疲労感が来たところで眠る

これが俺の今の一日だ。悪くは無い、むしろいつまでも続いて欲しいとさえ思う。

そして今日もいつものように目を閉じる……………

『ヤアアアアア

！！！！』

この日、親父さんが急病のためバイトは無く久しぶりに部活に出ていた。

部員は十人程だったが皆相当強い。

しかし龍介は剣道ではこの中でNO.2だ。

一番は部長なのだが結構良い勝負をする。

部活にこないのにと周囲からは妬まれる事もしばしば。

「よし止め！ 各自防具の手入れをして帰るように、では解散！」

『ありがとうございました』

「おい龍介えゝ、お前全然来ないのに何でそんなつええんだよ！」

更衣室に移動し部員の一人が龍介の首根っこを取っている。

「痛いですって！ 先輩」

「おいおい、それくらいにしとてやれよ」

「コツ教えるよコツを」

「コツですか……………無心になる……………ですかね」

「基本だろうが！」

「や、結構雑念入ってましたよ」

「むう……………」

周りに居た数人が笑っていた。

「よー」

校門のところでバカがいた。

「俺を待つてたのか？ クラスメイトB」

「もうそれはいいよ……………俺は柳ちゃんを待つて「あいつなら今日は宿直らしいぞ」マジで！？」

「ああゝあ、ついてねえゝなゝ」

そう言い歩き出す二人。

「ッ！？」

しばらく歩いていると突然頭の中で何かが過ぎる。

『たす…て…くだ……………』

女の声が聞こえたような気がした。

「どうした？」

「いや何でも……………！？」

足元を見ると薄く光を放つ魔法陣が描かれていく。

まずい！？ これは！

「おい！ 俺から離れる！ 早く！」

「は？ いきなり何？」

「チッ！ 恨むなよ！」

龍介は強引に蹴り飛ばす。

近くの塀に背中からぶつかり悶え苦しむ。

「カハッ！？ お前……ゲホッ……何………しやが………！？」

その瞬間、龍介の足元を中心に強い光が辺りを照らす。

やがて光は消えるも、そこには龍介の姿は無かった。

この日を境に俺の人生は一変した。
いやもしかしたら魔法使いに生まれてきた時点で、運命は決まっていたのかもしれない。

第1話 運命の日（後書き）

クラスメイトBの名前出てきませんでしたね

龍介「ていうか名前あるのか？」

さあ？ 無いんじゃない？

龍介「ひどいな……………それは」

第2話 可笑しな姫と龍介と……

城内地下「召喚の間」

「姫さま、準備が整いました」

ローブを着た男が女性に話しかける。

「そうですか、では始めてください」

「はっ」

数名の人間が中央にある床に描かれた魔方陣を囲む。

『サモンスキル
召喚魔法……………』

一人が魔法発動のため言葉を発する。

しばらくして魔方陣が光りだす。

その光はしだいに強くなり一面を照らす。

あまりの眩しさにそこに居た全員が眼を瞑る。

そして弱くなっていき光が消え、眼を開けると……………

そこには一人の人間が魔方陣の中央にいた。

黒髪で少しラフな髪型、顔は整っている。

背は180といったところだろう。

服装は白い半袖のカッターシャツで黒いズボン（ようは学校指定の服）を着た男だった。

「おお！？ 成功です！」

しかしその男は出てきた途端その場に倒れてしまった。

「！？ タイヘン、彼を医務室へ！」

女性が異変に気づいて声を上げる。

「は、はい！」

周りで何かが聞こえる

眼を開けようとするがなかなか開かない。

「……………ッ」

何とか眼を開けたものの視界が歪み、その場でバランスを崩す。

だれ……………だ……………

思考を動かそうとしたが意識が遠くなっていく。

途中女性の声が聞こえた気がした

「う……ん………？」

眼を開けるとさつきとは違う場所にいる。
上半身だけ起き上がり辺りを確認する。

「どこだ？」「コ」「

そこは何とも豪華な造りの部屋だった。
家具一式は揃っており、龍介はふかふかのベッド上にいた。

「起きたか」

後ろから声がする。

振り返り見てみると、

金髪の長髪で瞳の色は蒼く、綺麗な顔立ちをし、
胸から腰の辺りまでの鎧を着ており、剣を腰に差した女性がいた。

広い廊下を歩く二人。

さて……………さつきのは召喚転移魔方阵だな。
サモンゲート

あいつがいけないということは巻き込まれてはいないか……..
もしいたとしても斬り捨てるけどな。
こいつもさっきから無口だし、いきなり「ついてこい」だもんなあ
ゝ。

ああゝ、何かもういろいろムカついてきた。

などと考えているといつの間にか大きな扉の前にいた。

そして一緒にいた女騎士が扉を開ける。

扉の先には広い部屋があつた。
名付けるとするなら、そのまんま玉座の間だろう。

立派な椅子に座っている女性。
見た目は15、6歳くらい。

小顔で髪は少し青っぽく、ショートヘアの綺麗な髪。
カワイイ感じの薄紫色のドレスを着ている。

そして客人を迎え入れようばかりの花道状に並んだ人達が眼に映る。
その中を通り奥にいる女性の前で止まる。

「姫、連れてまいりました」

そう言つて片足をつき跪く。

「ありがとう、ウィーリア」

「勿体無きお言葉」

ウィーリアと呼ばれた女騎士はそのまま頭を下げる。

「で、俺にどうしろと?」

龍介は姫様に向かって話したず。

「それはまた後で話します、とりあえず今は聞きたい事がありますか?」

「いろいろあるが……俺を召喚しやがったバカ野郎は誰かな?」

これから何をするか雰囲気で行ったのか無言で龍介と“一人”を除いて全員が指差す。

その一人が口を開く。

「はい? 私が君を召喚したクライ「そんなことはどうでもいい」グアツ!」

近づいて“とりあえず”一発殴る龍介。

「なっ……何をす「いやあゝまさか召喚されるとはなあゝ、さすがに思わなかったよ アハハハハ」グガツ!」

爽やかに笑いながらも殴る龍介。

「キツ貴様! こんな事して唯で済むと「いいから逃げ」ひっ!」?

や、止め……ギヤアアアアアアアアアア……!!」

〈数分後〉

見事にタコ殴りにあつた男は何処かに運ばれていった。

「気は済みましたか？」

姫様が口を開く。

「ああ」

「そうですか、では本題に入らせてもらいます」

『私の助けになってください』

……………は？

「イヤです」

笑顔で返す龍介。

「何故です？」

何故ってあなた……………

「いきなりそんな事言われてOKするやつはいません」

「そうなんですか？」

どんな世間知らずだよ……………
てかもう梓超えてますよ。

「他当たってください」

「困りました、とりあえず話を聞いてください」

「……………わかりました」

姫様が辺りを見渡す。

「ここでは話しにくいですね……………ウィーリア、私の部屋へ彼を案内してください」

「よろしいのですか？」

「ええ、お願い」

「はっ、かしこまりました」

案内された場所、それは綺麗な部屋だった。

最初見た部屋より豪華だったがどこか寂しい感じがした。

しばらくして姫様がやってきた。

姫様とウィーリア、龍介の三人は中央にあるソファに腰掛ける。

「で、話とは何でしょうかお姫様」

「はい、この国は豊かなのですが小国です。今までは友好関係に守られていたので他の国から襲われませんでした」

「……………」

「しかし、最近では度々襲われるようになり、どうしたらよいのかと困っていると城の者が召喚を薦めてくれました。

古い文献を読ませていると昔そうやって免れたという国が見つかったので、助けてもらおうと召喚したということです」

「この国の王と王妃、姫の両親は姫が幼少の頃、病でお亡くなりになりました」

こんどは姫様ではなくウィーリアが語りだした。

「……………」

龍介は黙っていた。

話は数分続いた。

「姫は一人で何でもこなして今も立派に」「もういい……………」何？」

龍介は奥歯を噛み締める。

今言った一言が気に入らない。

「そうですか、なるほどよくわかりました。この話

」

嫌々で聞いていた表情が一変して真剣な顔へ変わる。

「断らせてもらっ

第2話 可笑しな姫と龍介と……（後書き）

姫様のところ変ですね……………スンマセン。

龍介「何故に謝る」

わかってて投稿してたからです……………

龍介「じゃあ書き直せよ」

いや、もうこのまま行こうかと思って。

龍介「なら謝るなよ」

ううっ……………

第3話 説教は程々に

「断らせてもらっ」

その言葉が二人の耳に入ってくる。

「どうして？」

姫様はわからないといった表情で聞いくる。

「人に頼る前に自分で行動しろ、とにかく俺は何もしない」

龍介は立ち上がる。

「ですから、自分でやっても無理でしたからあなたに「それは違うな」……………どういうことです？」

「さっきの話を聞いてわかった、自分でやって無理でした？ 違う、お前は“何もしていないんだ”」

「！？ そんなことはありません！
小さいときから一人で全部がんばって『思い込みもいい加減にしやがれ！！！！』ッ！？」

怒鳴り声が部屋中に響きわたる。

「一人だと？ お前にはそこにいる奴もこの城の人達が見えないのかよ……………」
お前にとってこいつらは唯のお飾りか？ それとも何でも言うことを聞く人形か？」

龍介はウィーリアに眼を向けて話す。

「拳句の果てには一人で全部がんばってだと？ お前ごときに何が出来る。」

ただその場で迷い勝手に困り果てているだけだろうが」

その言葉にウィーリアが立ち上がり剣を抜いて龍介の眼前に刃を突きつける。

「貴様……………これ以上の姫への侮辱は私とて許さんぞ」

低い声でそう呟く。

「俺にはこんな奴につくお前等の気持ちがわからねえよ。」

それにさっき、何故両親が死んだとかいう話をした？ 同情を買うためか？」

「それは……………」

ウィーリアは言葉を詰まらせる。

「残念だったな姫様だけが特別じゃない、俺にも親がいらないんだよ」

龍介は途端に寂しそうな顔になる。

「子供の頃、目の前で殺された……………」
病とかではなく“俺のせいで殺されたんだよ”」

「!？」

「死ぬ間際にさ、何て言ったと思う？　ハハッ笑っちゃまうよ」

『アンタなんて生まれてこなければよかった』

「……………」

二人には言葉が出てこなかった。

「それから俺は本当に一人で生きてきた。周りには誰もいない、毎日逃げて逃げて逃げまくってあの言葉を重荷にしてきた」

「あなたは……………」

「周りに人がいて、慕ってくれる人がいて、尽くしてくれてる人が

いて……………」

姫の言葉を見殺して話し続ける龍介。

「それでも……………一人で生きてきたみたいなの言う奴が、一番嫌いなんだよ……！」

その言葉で完全に沈黙する二人。

「お前はさ……………俺みたいに一人じゃないだろ、周りに人がいるだろ……………そういうこと言うなよ……………」

「あ……………」

姫の目から涙がこぼれ始める。

「姫!？」

その場でうずくまる姫。

「私……………今まで一人だつて……………思つて……………
とーさま かーさま
父様と母様が死んでしまつて……………私一人で生きているとばかり
つ……………うあああああ……………」

それから姫は子供のように泣きじゃくつた。

「気が済んだか？」

「ええ、見苦しい所を見せてしまいました」

「いや、泣きたい時に泣くのが一番だ」

「そうなんですか？」

「そうなんです」

「わかりました今度からそうしますね」

「ああ、でもあんま泣きすぎると迷惑だぞ」

「ふふ、そうですね」

アハハと笑う二人。

重荷が取れたのか、姫は少し明るくなっている。

それを見ていたウィーリアの顔は微笑んでいた。

「あら？　そういえば、まだあなたの名前を聞いていませんでした」
しばらく話し合って突然姫が思い出したかのように話す。

「ああ……………そうだな、俺の名前は皐月 龍介だ」

「皐月……………龍介……………龍介様ですね、覚えました」

様？ 何故？

「私は第十三代王女 アイシス ・ ステイラークです、アイシスとお呼びください。そしてこちらが」

「ウィーリア ・ アーラントだ、何と呼んでもかまわん」

「アイシスに……………ウィーリアね、わかった」

そして少し遅れた自己紹介を終えた。

「あらもうこんな時間」

アイシスが窓を見てそう呟く。

ここには時計という物がない。

しかし外の景色でわかるため然程問題にはならないみたいだ。

ぐうつうつうつ……………

そんな大きな音が鳴った場所はというと、何と姫様だった。
途端に顔が紅くなり後ろを向くアイシス。

「そ、そろそろ食事が出来ますわね。い、いきましょー」

その言葉に二人は笑っていた。

食事を終え、もう遅いからとウィーリアに地下にある、コンクリー
ト剥き出しの素敵な素敵な部屋へ案内されました。

「……………って、何で牢屋なんだあああああああ……!」

そこには硬いベッドと小さな机だけがありました。

「貴様が何と言おうと姫を侮辱したのは事実だ。よって今日一日
はそこで寝ろ」

そう言っただけで元来た道を戻っていくウィーリア。

「さっさと出せコラアアアアアアア」

それでもウィーリア足を止めず角へと消えていった。

「聞いてんかあああああ」「うっさいわね……!」 静かにしなさい
よ! まったく……………」……………」?」

女性の声がした。

よく見ると目の前の牢屋にも人がいた。

紅い髪のセミロングで綺麗な顔をしている。

黒のミニスカートに大きく胸の開いた赤いＴシャツ、

その上に薄地のロングコートと変な組み合わせだったが、動きやすそうだった。

「何だ、人いたのか」

「何よ、いちや悪い？」

「いや、何で捕まったのかな、と」

「そ、それは……その……ねえ？」

いや、聞かれても。

「最近ピンチだったからさあ、城なら何かイイモノあるかなあ……
……って」

……

あまり関わらないでおこう。

「ちょ！？ 何よそのかわいそうな人を見る眼は！」

「いや、べつに……」

眼を背ける龍介。

「まあ、いいわ。とにかく静かにしてね、今大事なところなんだから」

「脱走の計画でも練ってるのか？」

「そうよ！ だから邪魔しないでね！」

「はいはい」

そう言って何かブツブツと呟き始める女性。

さてと……………これからどうするかな。

Q どうやって元の世界に帰る？

A 無理だな、自分で移動したのならともかく召喚で無理矢理だからな。

しかも異世界ときたらなおさらだ。

Q ならこれからどう行動する？

A 考えてはいるが……………実行はまだだな。

しばらく待つか……………

そしてベッドに横になる龍介。

時間が過ぎ深夜ごろ……………

……………そろそろいいだろ。

第3話 説教は程々に（後書き）

強引にまとめちゃいました。

龍介「わかってて書くお前は馬鹿」

うわー、キツパリ言うねコイツ。

龍介「アホ、マヌケ、カス」

言いすぎだボケw

第4話 旅立ちの深夜

龍介はベッドから起き上がる。

あいつらまだ起きてるかな？ …………… あれ？

「ん？ 何だ、まだ考えてんのか？」

目の前には未だにブツブツ呟いて頭を抱えてる女性。

「あんた気楽ねえ。 同じ捕まってる身でしょ、あんたも考えなさいよ」

「悪いが俺はこれから出て行くところだ。 ま、がんばれ」

「はあ？ どうやって出るのよ。 ここは対魔法防御があるから魔法使っても意味無い【ベキン！】…………… って」

そこには格子の隙間から南京錠に手を伸ばし意図も簡単にぶっ壊してる龍介がいた。

「…………… あんた以外に力あるわねえ」

「結構錆びてたし、捻じ込みながら引つ張ると簡単に折れたぞ？」

「いや、普通無理だから」

そのまま何事も無かったかのように普通に出てくる龍介。

「ちょうどいいわ、私のも開けてちょうだい」
「いや」

.....

「そういうのは、もうちょっと考えて言いなさいよ」

「自業自得だろ」

「じゃあ、出してくれたらお金あげる」

「お前、金無いらここにいるんだろうが」

「うっ.....」

「ごもつとも。」

「んじゃ条件」

「なにになに？」

「これから先、俺と行動する事」

「何でそんなこと.....」

「はっ！？ まさかあんた、私の身体が目当てなん」
「じゃ、さよなら」
「冗談よ冗談！ わかったわよ、一緒に行ってあげるから！」

「よし成立だな」

【バキンー!!】

そしてまたも楽々と破壊する龍介。

「で？ 何でまた一緒に行動しろなんて言ったの？」

「いやあ、召喚されたばかりで道もなにも知らないからな」

「召喚？ へえ、あんた召喚されし者だったんだ」

「サモンナークス？」

「ええ、召喚によって出てきた者をそう呼んでるわ。
たまに召喚して強力な人や獣を呼ぶ国があるんだけど……あ
んな力は強いけど魔力は全然感じないわね」

魔力………か。

とたんに寂しそうな顔をする龍介。

「どしたの？」

「いや、何でもない。………俺は臯月 龍介だ、よろしく」

「私はシエリー・レインカーズよ」

そして握手を交わす二人。

「よしじゃあ、さっさと上に行くぞ」

「それもそうね。さ、早くこの城から出ましょ」

その言葉を聞いて龍介は少し考える。

「いや、ちょっと寄り道して行く」

「どこに？」

当然聞いてくるシエリー。

「お姫様のところ」

「ウフフ……………ウィーリア……………もっと楽しみになさい……………」

「ひ、姫……………ここ……………これ以上は……………ああ！」

アイシスの部屋で服を着たままベッドの上で、アイシスが上ウィー

リアが下という構図になっている。

「だめよ。二人の時は名前で呼びなさい……………」

「あ…………くっ！ア、アイシス…………様……………ああん！？」

「フフフ……………」

「あ！……………もう、だ…………めで…………す……………んあ！？」

……………

「うわー、あの二人ってこういう関係なんだ」

「アイシスが“攻め”か……………逆だと思ったけどな」

いつの間にか部屋に入ってきていた二人。

「なっ！？……………あ……………うっ……………」

二人がいるとわかった途端、顔を真っ赤にするウィーリア。
アイシスは平気な顔をしている。

「あ、どうぞ気にせず続けて続けて」

「う、うつうつるさい！！　だいたい何故、貴様がここにいる！？」

そう言い近くに置いてあった剣を取る。

「そのことなんだが、アイシスには悪いが俺はこれから出て行く」

「そうですか、わかりました。お気をつけて」

.....

やけに簡単だな。

「もうちょっと止めるかと思ったんだがな」

「ええ、多分そう言ってくると思ってましたから」

なるほど。

「ああ、それと成り行きでこいつ連れて行くことになったから」
そう言ってシエリーを指差す。

「どうも」

「ん？ お前は.....誰だ？」

知らんのかよ.....。

「いや、知らないならいいよ」

「？」

そして城門前へと移動した四人。

「じゃ、短い間だったけど元気でな、アイシス」

「はい、こちらの都合で召喚してしまつてすみませんでした」

「それはもういいって」

「……………わかりました、ではお元気で」

「……………じゃあな」

そのまま外へ進む二人。

「おい！」

「ん？ おわ！？」

ウィーリアが紐で縛られた布の袋を投げつけてきた。
それを慌てて受け取る龍介。

「餞別だ！ 持っていけ！」

中を開けると金貨や銀貨など結構な量があつた。
おそらくこの世界の金だろう。

「うわー、それすごい金額よ」

それにしてもいいのか？ こんなのもらつて。

……ま、いいか。くれるってんだし。

「ありがとなー！ ウィーリア、いいところあるんだなー」

またまた顔が赤くなるウィーリア

「な………う、うるさい！ さっさと行けー！」

その言葉にアイシスが陰で笑っていたことは内緒にしておこう。

龍介達はアイシス達に手を振り城を後にした……………。

「ってえ！ 何で野宿なのよ ……！！！」

「だって、宿無いし」

二人は道の外れにある木の下で叫んでいました。（主にシエリーが）

第4話 旅立ちの深夜（後書き）

いやあ、風邪で寝込んでしまっていて小説書けませんでした、アハハハハ。

龍介「大丈夫なのか？ 無理するなよ」

お、心配してくれるんだ。うれしいな」

龍介「悪化したら、その分俺の出番減るじゃないか」
そっちの心配かよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5408d/>

マイライフ＝マイフェイト

2010年10月15日22時46分発行